

ご挨拶

研究代表者 鈴木直（聖マリアンナ医科大学産婦人科学）

本研究事業のミッションは、若年乳がん患者のサバイバーシップにおいて最も重要な課題の一つである妊孕性温存に関する「心理支援体制の構築」となります。ご存じの通り、近年乳がんは30歳～39歳までの若年女性部位別年齢階級別がん罹患率のトップの疾患となっています。罹患率が上昇しかつ若年化の傾向も示す乳がん患者の将来の妊娠・出産に関する「がん・生殖医療（妊孕性温存の診療）」は、少子化問題を抱える我が国において重要でかつ喫緊の解決課題ともなり得るかと思存じます。若年乳がん患者は、がんの告知から治療開始までの僅かな時間の中で早急に妊孕性温存に関する自己決定を余儀なくされます。しかしながら妊孕性温存に関する若年乳がん患者の心理支援に関する研究報告は皆無となっています。がん告知時期の精神状態は、がん診断によるショックのため不良で、患者が独力で冷静に広い視野から妊孕性温存に関する意思決定を行う事に困難があります。そのため、精神的な危機介入への備えが可能でかつがん医療のみならず生殖医療にも精通した臨床心理士による心理支援が急務となっています。実際に不妊の心理カウンセリングは、その一つである心理教育も不妊ストレス、抑うつ、不安の軽減、夫婦関係の改善に効果をもたらすと考えられています。そこで、我々は39歳以下の若年乳がん患者と配偶者を対象として、将来の妊娠・出産をテーマとした精神的健康と夫婦関係の改善のための夫婦心理教育プログラムの開発を行いました。研究課題名「若年乳がん患者のサバイバーシップ向上を志向した妊孕性温存に関する心理支援体制の構築」は、厚生労働科学研究費補助金（がん対策推進総合研究事業）研究として平成26年度から3年間、多くの医療従事者の方々からの多大なるご協力とご指導によって遂行されました。3年間の成果は、（1）がん・生殖医療専門心理士養成講座を開催し（日本生殖心理学会ならびに日本がん・生殖医療学会と共同）、18名のがん・生殖医療専門心理士を要請したこと、（2）若年乳がん患者とその配偶者を対象とした妊孕性温存に関する心理教育とカップル充実セラピーを開発したこと、（3）（2）を受けて、多施設ランダム化比較試験（O!PEACE試験）を行ったことなどがあげられます。特筆すべきは、世界初の妊孕性温存に関する心理に関わるランダム化比較試験（O!PEACE試験）を行う事ができたことと存じます。本試験は、15名の臨床心理士の皆様（臨床心理士、生殖心理カウンセラー、がん・生殖専門心理士）による、1症例につき約2回ものリクルートで意思決定を得ており、臨床心理士の先生方のボランティア精神によって成り立った試験でもあります。参加して頂いたご施設には、患者さんの登録に際しまして多大なるご協力を頂きました。この場をお借りして、衷心より御礼申し上げます。さて、本日の「若年乳がん患者の妊孕性温存に関する心理支援セミナー」では、3年間の我々の研究成果を皆様にご報告申し上げることになろうかと存じます。忌憚なきご意見ご批判を賜り、充実した議論が展開されることによって、本領域の発展の一端を担うことができれば幸いに存じます。最後に、本研究事業を強力なモチベーションで推進して下さった国立成育医療研究センターの小泉智恵先生と、縁の下の力持ちとして本研究を支えてくれた聖マリアンナ医科大学産婦人科学講座の西島千絵先生、中島ひろみ様、本事業に携わって下さった全ての方々に深謝申し上げます。